会　　議　　録

会議名 （審議会等名）		第２回相模原市立小中学校の望ましい学校規模のあり方検討委員会		
事務局 （担当課）		学務課　電話０４２－７６９－８２８２（直通）		
開催日時		平成２７年８月２６日（水）　１５時００分～１７時００分		
開催場所		相模原市役所　本館２階　応接室２		
出席者	委　員	１２人（別紙のとおり）		
	その他	３人（湘南小学校長、橋本小学校長、大野台中学校長）		
	事務局	１０人（教育環境部長、学務課長、学校施設課長、学校教育課長、教職員課長、他５人）		
公開の可否		■可　□不可　□一部不可	傍聴者数	０人
公開不可・一部不可の場合は、その理由				
会議次第		１　開会あいさつ ２　議題 （１）前回議題の確認、追加資料の説明 （２）学校規模の現状について （３）学校規模による長所、短所について （４）その他 ３　意見交換 ４　閉会		

審　議　経　過

主な内容は次のとおり。（○は委員の発言、△は関係者の発言、●は事務局の発言）

１　開会あいさつ
　小松会長あいさつ

２　議題
（１）前回議題の確認、追加資料の説明
　前回の検討委員会で委員から要望があった追加資料について、事務局から説明を行った。
○　平成３３年度までに１０校以上でクラス数の増加が予測されているが、事務局は教室数の不足は１校のみで発生すると想定している。他校は教室の増設なしでも対応可能ということか。
●　児童生徒推計に基づくクラス増であれば、現在の余裕教室で対応できると考えている。
○　仮設校舎について、５年のリース期間終了後は市の所有物になるのか。
●　そのとおり。
○　児童生徒推計を見ると、児童数は増加するがクラス数は減少するという小学校があるが、その理由はなにか。
●　１クラスの児童数の上限は、１・２年生は３５人、３～６年生は４０人である。クラス数は各学年の児童数により決定されており、全校の児童数が増加しても、クラス数が減少するということはあり得る。
○　資料１について、改修費が学校によって大きなバラつきがあるが、その理由はなにか。
●　資料１は平成２５年度決算額に基づいて作成した資料である。例えば、突発的な大雨による雨漏りへの対応など、年度や学校によって、修繕内容に差が生じている。

（２）学校規模の現状について
（３）学校規模による長所、短所について
　議題２及び議題３について、事務局より資料の説明を行った。
○　１２～１８学級を適正な学校規模に含めている自治体が多い中、相模原市は１８～２４学級を適正な学校規模と定めているが、その理由はなにか。
●　平成１０年の学校規模適正化懇談会が開催された当時の状況として、合併前の旧市域は現在よりも児童生徒数が多く、当時の学校の現状に即して適正な学校規模を設定したと承知している。

関係者として出席した湘南小学校長から、学校の現状について説明を行った。

△　湘南小学校の児童数は３０名であり、市内で２番目に少ない。全体では男女同数だが、学年では男女比に偏りが生じている。

学校の規模が小さいことによるメリットとデメリットについて。（別紙一覧）

資料１１について、内容に概ね同意できる。

○　運動会や遠足などの学校行事はどのように行っているのか。

また、給食は学校で作っているのか。

△　保護者や地域の協力を得ながら、学校行事は円滑に行えており、運動会では各児童の出番を多く確保できている。

給食は城山学校給食センターから配送されている。また、給食の時間は学校全体で一緒に食べており、配膳の時間が短いので温かいうちに食べることができるというメリットがある。６年生は年長者の役割を求められることで、ストレスを感じる児童もいるようだ。

○　近隣の学校との交流はあるのか。

△　小中連携教育の一環として、相模丘中学校を中心に、近隣の小中学校との交流があり、特に６年生は部活動見学などを通して近隣の中学校と関わりを持っている。

○　学校現場の意見として、望ましい学校規模のあり方についてどのような方向性が望ましいと思うか。

△　どの視点から検討するかによって、結論が変わってくる問題だと思う。学校長としては、現在あるものを最大限活用した学校運営に努めたいと考えている。

○　児童数が少ない原因について、学区内の児童数が少ないのか、それとも、私学に通う児童が多いなどの要因があるのか。

●　湘南小学校の学区では、学区内の児童の多くがそのまま湘南小学校に就学していると理解している。

○　スクールバスを利用しているとのことだが、遠方から通っている児童がいるということか。

△　葉山島の児童の登下校に関して、通学路の道路事情により危険が大きいため、安全対策としてスクールバスを利用している。

○　湘南小学校の学区は面積が広いが児童数が少ないということは、住民の数が少ないということか。

△　湘南小学校の学区は市街化調整区域に指定されており、新しい世帯が転入してくることがなく、従来の世帯に子どもが生まれない限りは基本的に児童が増えない。

○　教育活動を行ううえで、最低限必要な児童生徒数などはあるのか。

△　児童数が少なくても、皆の目標になるような児童がいれば、学びあいがうまくいく。同じレベルの児童ばかりだと、切磋琢磨が少なくなってしまう。

関係者として出席した大野台中学校長から、学校の現状について説明を行った。

△　大野台中学校の生徒数は３４８名で、各学年３クラスであり、旧市域では２番目に小さい学校となっている。開校当時は生徒数が急増していた時期であり、ピーク時の昭和６０年には１２クラスの学年もあった。

日常の学校生活に支障はなく、各生徒に教職員の目が行き届いている。一方で、学校祭などの大きいイベントの際の盛り上がりが少し寂しいと感じる時もある。

生徒の雰囲気はおっとりとしていて、不登校等も少ない。

小規模校のデメリットとして、教職員が少ないため、９教科の教員が揃わずに複数科目を担当する教員が発生することや、顧問の人数の制約で部活動の数を増やせないということがある。また、教職員一人あたりの事務処理負担が大きい。

○　進学状況はどうか。

△　公立高校を希望する生徒が多い。進路指導で生徒一人ずつに目が行き届いたフォローができる。

○　全教科の教員が常に揃わないという状況なのか。

また、具体的にどういう教科を掛け持ちしているのか。

△　ここ数年は揃わないことが多い。大野台中学校より小さい８クラス以下の中学校は揃っていないと思う。

「技術と家庭」や「美術と英語」等の掛け持ちがあった。

関係者として出席した橋本小学校長から、学校の現状について説明を行った。

△　児童数９２９名の大規模校である。

６５名の職員がいるが、職員室のスペースが足りない。

保護者からは、児童数が多すぎるという声を聞くことがある。

また、教育環境の説明を聞き、指定変更許可区域制度を利用して橋本小から小山小へ就学校を変更する新入学児童も多い。

給食の時間等は、廊下が渋滞しないように、動線をかなり工夫している。

朝会や全校集会の際には、移動時間が１５分程かかり、教育課程の支障にもなっている。

休み時間の校庭の使用に際して、事故を防ぐために使用する学年を制限している。

運動会の際には、児童数が多いため徒競走の時に各児童の名前をコールできないということや、保護者用のトイレが足りないなどの問題が生じている。

授業で特別教室を使用する場合の割り当てが難しい。

新卒の教職員が割りあてられる事が多いので、経験が浅い教職員の割合が高い。

教職員一人当たりの事務分掌が少ない。

校外活動の際の引率スタッフが多いので、活動の間口を広げることができる。

児童同士が切磋琢磨する環境を作ることができ、またクラス替えの時には多様な人間関係に触れられるように編制しやすい。

３　意見交換

○　学校規模による長所と短所について、他都市や文科省の議論及び校長先生の意見を整理すれば、纏めることができると思う。

○　小規模校は一人ひとりにきめ細かい指導ができるという反面、干渉が息苦しいと感じる児童生徒もいる。

○　小規模校は、学校施設を制約なく、自由に使うことができる。

○　小規模校は、一人当たりの清掃の負担が重い。

○　小規模校の児童生徒は大人数での学校生活に慣れていないため、転校や進学で大規模校に移った際に、当初の戸惑いが大きい。

○　小規模校は、教職員の数が少ないため、特に学年の仕事の負担が大きい。

○　小規模校の保護者は、ＰＴＡの活動を複数年勤めることが多いので負担が大きく、保護者同士の関係が固定化されるので、トラブルが起きた際の対処が難しい。

○　小規模校で卒業アルバムを作成する際は単価が高いなど、金銭的負担が他校の保護者に比べて大きい場合がある。

○　小規模校で、複数の教科を掛け持ちする教員が発生するようになると、教員免許の制約もあり、教員配置のバランスを取ることが非常に難しい。同様に、学級担任の配置についても苦慮することになる。

○　児童生徒数に対して、教室数が不足するような学校があるとのことだが、相模原市の学校は、何学級を想定して設計しているのか。

●　建設時は、当該地域の状況に応じて必要な規模の学校を建てており、一定の基準に則って学校の大きさを決めていたわけではないと認識している。

○　現状の学校は、地域に応じて、教室数や校庭の大きさはバラバラということか。

●　そのとおり。

文部科学省が設置基準を定めているが、地域の事情に応じて必要な土地を確保し、設置基準を満たすように建物を建て、校庭を確保している。

例えば、新設３校（富士見小学校、夢の丘小学校、横山小学校）は、限られた敷地の中で、文科省の設置基準を満たすように校舎を建築している。

○　平成１０年時の学校規模適正化懇談会から適正な学校規模について提言されているが、適正な学校規模の学校であっても、収容できない学校施設が現状で存在するということか。

また、この検討委員会で望ましい学校規模を検討するにあたり、施設上の制約はどのラインなのか。

●　施設上の制約はない。将来的に、大規模な開発等があった場合は、増加する児童生徒数を想定し、教室数の不足が見込まれるならば、仮設校舎の建設や通学区域の変更で対応していく。

○　望ましい学校規模を定めるにあたり、議論の進め方として、全市統一の基準を設定したうえで、個別の事情には別途対応していくのか。または、現状の相模原市の学校施設の上限を踏まえたうえで、最大限に活用する方向で検討を進めるのか。

●　相模原市は地域で子どもを育てるという視点を大事にしているので、数値上の課題で通学区域を決めることは難しい。その意味で、施設ありきではなく、子どもの教育をメインに検討を進めていただきたい。

○　旧津久井郡の中でも学校事情に地域差がある。

○　小規模校の話として、生徒が高校に進学すると適応しづらいという小規模校のデメリットがあるが、子どもは短時間で慣れることができるという意見もある。

　また、人間関係が固定化するということも小規模校のデメリットとして挙げられるが、学校現場からは、それ程固定化せず問題視されていないという声も聞かれる。

○　小規模校はきめ細かい指導がされているので、塾いらずという声がある。

○　育成会との繋がりは城山地域で低く、津久井地域は高い。

　自治会の加入率が高く地域との繋がりが強い地区は、子どもが私学に進学したとしても、地域との関係が途絶えないようだ。

○　日本の親や先生は、学校規模に関わらず、現状のメリットを最大限活用し、デメリットを工夫して押さえ込むことで、うまく教育してくださっている。一方で、適正な規模を設定することでデメリットをできる限り少なくし、忙しい教職員の負担を軽減することも必要だと考えている。

○　学習指導要領や教科書は、ある程度の学校規模を想定して定められているものであり、そこから極端に外れている場合は教育活動に支障がでるだろう。

○　全国的な少子化の流れを意識したうえで、子どもたちが色々な人間関係のなかで育っていけるように環境作りをする必要がある。

△　小規模小学校出身であっても、中学校に進学して大人数の中で学ぶことを前提に小学生のうちから学習していれば、中学校でも十分に活躍できている。

△　大規模校では、分母に比例してクレームや課題を抱える家庭の数が多く、対応に苦慮する場面がある。

４　閉会

以　上

第２回相模原市立小中学校の望ましい学校規模のあり方検討委員会委員出欠席名簿

	氏　　名	所　属　等	備　　考	出欠席
1	小松　郁夫	流通経済大学教授	会　長	出席
2	斎藤　文	産業能率大学教授		出席
3	田所　昌訓	相模原市自治会連合会	副会長	出席
4	奥山　憲雄	相模原市公民館連絡協議会		出席
5	齊藤　賢一	相模原市子ども会育成連絡協議会		出席
6	竹内　健	相模原市立小中学校ＰＴＡ連絡協議会		出席
7	鈴木　俊彦	相模原市立小中学校ＰＴＡ連絡協議会		出席
8	森山　小百合	相模原市立小中学校ＰＴＡ連絡協議会		出席
9	奥原　正弘	公募		出席
10	川村　康昭	公募		出席
11	天野　和広	相模原市立小学校校長会		出席
12	佐藤　陽一	相模原市立中学校校長会		出席